

最後の武士が戦った

会津を歩く

鳥羽・伏見の戦いに敗れた新選組は会津へと向かい、戊辰戦争は、東北を舞台にそのクライマックスを迎えた。京都守護職を任された会津藩領を中心に、新選組がたどったその道程を歩いてみる。

文撮影◎大村仁



二本松城まで東北自動車道二本松ICから県道355号線を東に15分。J R東北本線二本松駅徒歩20分。

白河口の戦いによって 東北戊辰戦争の勝敗は決した

「白河以北一山百文」とは、戊辰戦争後、東北地方を蔑むための言葉として官軍から発せられたとされているが、東北は常に都から離れた辺境の地として蔑視の対象とされてきた。その歴史は、遙か古代にまで遡る。朝廷が整備した官道に設けられた鼠ヶ関、勿来関、白河関は奥州三関として蝦夷の侵入を阻止するなどの目的で設けられた。これらの関を越えたその先が道の奥、「陸奥（みちのく）」である。陸奥とは、都人から見た未開の地であるが故、ロマンがかき立てられるのだろう。勝手なイメージと解釈で、美しい歌枕に仕立ててしまった。

「都をば霞とともにたちしかど
秋風ぞ吹く白河の関」——能因法師
東北人の劣等意識は、そうした僻地と蔑まれてきたことへのコンプレックスなのかもしれない。故に、東北人にとって、この白河は特別の意味を持っていた。「白河を越えられたらふるさとの東北に戦火が及ぶ」。戊辰戦争の戦火が東北に迫っていた時、白河を防御するため奥州越列藩同盟の諸藩が白河に結集し、激しい攻防を繰り広げたのは、心情的には必然だったと言える。

慶応4年（1868）4月19日、

旧幕府方が宇都宮の戦いに敗れ宇都宮城が陥落。足を負傷した土方歳三は島田魁、中島登、漢一郎、畠山二郎、沢忠助、松沢乙造の六人を従え会津田島を経て若松に入り、土方らよりも先に会津入りを果たしていた斉藤一と合流する。再会も束の間、会津藩の指揮下に入った斉藤と新選組の一部は、閏4月5日に白河口の戦いに向かう。新選組が投宿したという脇本陣「柳屋旅館」は、旅館そのものは無くなったものの、当時の蔵座敷が今でも残っている。白河城下の一郭にあり、最大の激戦となった5月1日の戦いにはここから出陣したとされる。

白河口の戦いは、慶応4年4月から7月にかけて、奥羽越列藩同盟側と新政府軍が白河城をめぐる激戦な戦いを繰り広げた。同盟側の戦力4500以上に対し、新政府軍側は最大で約1500。戦況は、頭数で優る同盟側の軍に有利と思われたが、新政府軍側は関東での武力鎮圧が功を奏し、その戦力を次々に東北へと向けることができるようになり、別のルートから東北奥地へと侵攻。棚倉城や二本松城などを次々と落城させたことによって、白河よりも北側を制圧することに成功した。背後を奪われた列藩同盟側は白河周辺からの撤退を余儀なくされ、白河口の戦いは列藩同盟側の惨敗という形で終



わきほんじん「やなぎやりょかん」あと
脇本陣「柳屋旅館」跡
しらかわぼしんけんぶんかん
「白河戊辰見聞館」

新選組斉藤一局長と106名の隊士が宿営したとされる柳屋旅館。現在、内部は非公開となっている。白河見聞館は、白河口の戦いに関する史料や新選組関連の資料が展示されている。
福島県白河市中町65（楽蔵内）
TEL：0248-29-8630 9:00～17:00 無休
大人200円、小中高生100円

にほんまつじょう
二本松城

二本松藩は白河口の戦いに戦力を集中していたため、手薄だった二本松城が攻撃されわずか1日で落城した。このとき12～17歳の少年25名による「二本松少年隊」が組織され、この戦いで多くが戦死する悲劇も生まれた。



難攻不落の名城として謳われ、会津戦争の際には1カ月もの激しい攻撃に耐えた若松城（鶴ヶ城）。現在の天守閣は復元されたもので、内部は若松城天守閣郷土博物館になっている。

結する。この戦いによって、菊地央をはじめ多くの新選組隊士が戦死している。菊地央の墓は、白河市大工町にある天恩皇徳寺に、戦死人供養碑と並び葬られている。

白河市内を歩いていると、白河口の戦いで命を落とした両軍の墓や供養碑を至るところで目にする。白河の人々にとって、長年住み慣れてきた町を戦場にされた両軍に対して、どちらの側にしても快くは思っていないであらうはずなのに、丁重に弔っている。それらの墓所や慰霊碑は掃除が行き届き、花まで手向けられていたりする。それは、白河人の素性の良さなのだろうか、それとも歴史的な意義が他にもあったのだろうか。答えを見いだすことなく、夕暮れに赤く染まる小峰城を横目で見ながら白河の地を後にした。

会津に入った 土方歳三と新選組

会津に入った土方歳三は、若松城下の越後街道・米沢街道の旅籠として栄えた七日町にある清水屋旅館に投宿した。この清水屋には、会津藩校に強い関心を抱いて視察に訪れた吉田松陰や、同志社の創設者である新島襄とその妻の八重が滞在している。現在、旅館は取り壊され銀行の敷地となっており、控え目な案内看板だけが往事の面影を知る手がかりとなっている。

宇都宮の戦いで深手を負った土方

激戦地・会津に残る 新選組隊士の面影

は、若松城下より東に位置する東山温泉（当時は天寧寺温泉と言われたとも）に通い、療養に専念したと伝えられている。土方が若松に辿り着いたのは、慶応4年4月29日で、再び若松を離れたのは母成峠の戦いに敗れ庄内藩に援軍を求めに向かった同年8月23日である。

およそ4カ月もの間、会津の地に留まっていた土方は、東山温泉の湯

に浸かりながら闘争と戦乱に明け暮れた5年の歳月を振り返り、何を思っていたのだろうか。局長と副局長という立場で新選組を率いてきた、盟友・近藤勇の死。旧幕府軍側の戦況は日増しに強まり、多くの隊士を失いながら東北まで敗走してきた長い道のり。そして、これから大きく変わるであろう日本の行く末を案じていたに違いない。鬼の副長と怖れられ、数々の逆境を乗り越えてきた強靱な精神の持ち主であった土方だったが、鳥羽伏見の戦い以降、もつとも平穏で大きな戦いもなかった半年近くの間、彼の頭には様々な思いが浮かんだに違いない。近藤や仲間

の死を思い、苦悩したのではないか。そのような境遇を慰め、土方に生

気を吹き返してくれたのが会津という土地柄だったともいえる。会津を訪ね歩くと、まず会津人の人柄の良さに感嘆させられる。会津の人々は朗らかに接してくれるが、決して礼節を失しない。時に、無骨とさえ思えるくらいに。そうした会津人気質は、かつての姿を再現した会津藩校『日新館』入り口に掲げられている。「仕の掟」を読むと、合点がいく。什とは会津藩士の子弟を教育する組織のことで、この組織の決まりがこの仕の掟と呼ばれるものである。これに背いた者は、子供同士の組織であっても、年長年少を問わず罰則が加えられるという厳しいものだった。仕の掟

一、年長者の言ふことに背いてはな



あいづはんこう『にっしんかん』
会津藩校『日新館』
全国初の民間学問所「稽古堂」が前身。寛政10年(1798)会津藩家老田中玄宰の藩政改革策「教育の改革」が日新館誕生のきっかけとなる。会津藩士の子たちに伝えられた「仕の掟」の末文「ならぬことはならぬものです」が会津人の道徳観の神髄であり、その実直さが会津戦争へと至る悲劇を呼んだのかもしれない。



鶴ヶ城へは東北新幹線郡山駅下車、磐越西線で60分、会津若松駅下車。バスで25分。車の場合、東北自動車道郡山JCTから磐越自動車道・新潟方面、会津若松IC下車10分。



つるが 鶴我

鶴我では、桜肉の刺身や桜鍋などの馬肉料理を、会津の地酒と共にフルコースで堪能することができます。福島県会津若松市東栄町4-21
TEL：0242-29-4829
11:30～14:00（昼の部）・17:00～22:00（夜の部） 不定休



母成峠での敗戦によって、 会津の命運は決まった



ぼなりとうげこせんじょう
母成峠古戦場

会津藩領への侵入ルートは幾つかあったが、新選府軍は警護が薄いと判断した現在の郡山市熱海町から猪苗代町を経て会津に至る母成峠越えを選択し、2,200の兵を進軍させた。一方、迎え撃つ旧幕府軍の兵力は800。兵力と武器の差は歴然としており、母成峠はわずか一日で突破され会津藩内への侵攻を許す結果となった。この戦いが会津戦争の大きな転換点になったのである。



旧商家に遺る会津戦争の痕跡

会津若松市大町一丁目にある江戸時代後期に建てられた会津漆器商「鈴木屋利兵衛」の店内にある櫓の大黒柱には、新政府軍が付けたとされる刀傷が残されている。店の人の話によると、戦いで付いた傷跡ではなく試し斬りの跡だという。

きゅうたきざわほんじんあと 旧滝沢本陣跡

会津藩主が領内巡視や参勤交代の際に休息所として用いた場所で、松平容保公が白虎隊に出陣を命じた場所でもある。土方歳三は容保公を警護するためこの本陣にとどまったという。茅葺き屋根による書院づくりの建物内には、弾痕や刀傷が残っている。



あいづあひ 会津葵

会津藩御用茶間屋の系譜を持つ老舗の菓子舗。甘みを抑えた上品な味わいの南蛮かすてあん「会津葵」をはじめ、和と洋の折衷による異色の創作菓子を創り続けている。福島県会津若松市追手町4-18
TEL：0120-26-7010
9:00～18:00 無休

りませぬ
一．年長者には御辞儀をしなければなりません
一．虚言を言ふことはなりません
一．卑怯な振舞をしてはなりません
一．弱い者をいぢめてはなりません
一．戸外で物を食べてはなりません
一．戸外で婦人と言葉を交へてはなりません
ならぬことはならぬものです
この愚直とも言える、まっすぐな精神性は今日の会津人の中にも脈々と受け継がれ、それが現代の会津若松市を形成しているのだと感ずる。
鬼の副長と呼ばれた土方もまた、この一本気な会津人の気質に触れ、

自信と生気を取り戻していったのではないだろうか。母成峠の戦いに敗れ敗走してきた新選組が天寧寺に宿陣した際、土方は近藤勇の遺髪をそこに埋葬し、墓を建立したと言われている。これも想像の域を超えないが、このとき既に自分の命があと僅か、このとき既に自分の命があと僅か、戊辰戦争の結末を見ることがなく何処かの戦場で果てると予見していたのかもしれない。
会津藩の敗戦が濃厚となり
新選組は各々の道を歩み始めた

幕府軍は3つの陣を構え応戦したが、圧倒的な兵力の前にわずか1日で勝敗が決着し、旧幕府軍の兵士は四散するように退却した。母成峠を制圧した新政府軍は翌22日には猪苗代に到着し、台風による豪雨にもかかわらず若松まで軍を進め同日夕方には十六橋に到達。そして、23日午前には若松城下へと突入する。
この母成峠の戦いにおける土方歳三の動向はよく分かっているが、退却の最中に猪苗代で斉藤と一端合流している。このとき斉藤は会津藩に忠誠を尽くすべく、会津に留まって最後まで戦うことを進言するが、土方は援軍を得るため庄内へと向かう。そして、その後土方と斉藤が再会することはなかった。
会津に残留した斉藤は、会津藩士とともに会津藩が降伏した後も新政



近藤勇・斉藤一の墓

写真上は、会津若松市七日町阿弥陀寺の敷地内にある斉藤一の墓（藤田家墓地）。写真下は、土方歳三が会津若松市東山町天寧寺に近藤勇の遺髪を埋葬し墓を建立したとされる。



かしまこじんじや
鹿島御兎神社

日和山の頂にあるこの神社は、新選組が石巻に逗留する際の屯所として使った場所と伝えられている。参道の鳥居からは旧北上川の河口と仙台湾を一望することができる。



玄関のへ五を鳴らあ十すと奥か五ら気の良十さ玄関な五人が出て十きてもや五しい笑顔十で迎えて五れました◎宿という五りも見た十のにもワ五ンを利用

府軍に抵抗を続けていたが、容保公が派遣した使者の説得により投降する。その後は、捕虜となり謹慎生活を送った。家名断絶となった旧会津藩は藩の再興を許され、下北半島に斗南藩を開いた。齊藤も会津藩士として五戸に移住し篠田やそと結婚。後に、元会津藩大目付高木小十郎の娘時尾と再婚する。その際の上仲人を元藩主・松平容保公、下仲人を元家老・佐川官兵衛、山川浩、倉沢平治右衛門が務めた。そして、容保公から藤田五郎という名を拝命し、以後生涯その名を名乗ったという。藤田に改名した齊藤は、東京に移住し警視庁に採用され、西南戦争で活躍し、政府から勲七等青色桐葉章と金100円を授与され、明治24年（1891）に退職。大正4年（1915）胃潰瘍のため72歳の生涯を閉じた。奇しくも長倉新八が死去した同年でもあった。齊藤一の墓は、会津若松市七日町の阿弥陀寺にある。齊藤の出生については武蔵国とされているが、一部には会津出身という見方もある。

会津の地を訪れて以来、齊藤は会津藩とともに戦い、そして会津藩士としての生涯を送った。なぜ、齊藤が土方と行動を共にせず、会津に残ったのかは定かでないが、普段から口数の少ない性格、愚直なまでの主君に対する忠誠心、剣術に長けて死をも怖れぬ強靱な精神力などといった気質を見ると、齊藤は最も会津藩

士らしい気質を備えた武士だったと言えるかもしれない。

北の大地に勝機を見いだそうと東北を後にした土方歳三

援軍を求めて庄内を目指した土方だったが、既に恭順体制にあった庄内藩は土方が庄内へ入ることさえ認めず、藩境で足留めを余儀なくされ、庄内での援軍要請を諦め仙台へ向かうことを決意する。

仙台へと至る足取りは定かではないが、9月2日には、今の仙台市青葉区国分町（現在はオフィスビルが建っている）にあった『外人屋』と



せんだいはんこう
仙台藩校
『ようけんどう』のもの
『養賢堂』の門

会津藩校『日新館』とともに、戊辰戦争で果敢に戦った優れた藩士を育成した仙台藩の藩校。その痕跡は、仙台市若林区南鍛冶町の秦心院の山門として遺されるのみとなった。

いう宿に榎本武揚やフランス人軍師のブリュネラと宿泊している。そして、榎本と共に奥羽越列藩同盟の軍議に参加。9月12日には榎本らと仙台城に登城し談判するも、仙台藩も既に恭順に傾いていたことから、話は決裂。榎本艦隊が停泊している近くの石巻へと移動し、箱館を目指す準備を進めていた。新選組は日和山の頂にある鹿島御兎神社に屯所を構え、榎本は旧毛利邸に投宿。ここで度々軍議が開かれた。そのような最中、仙台藩、会津藩、庄内藩が相次いで降伏。会津藩という後ろ盾さえも失われた新選組は、さらに追い詰められていく。

今は解体されてしまった旧毛利邸の2階座敷には、仙台藩のあまりの弱腰な姿勢に激昂した土方が付けたとされる刀傷が残っていたという。土方にしてみれば、次々と寝返っていく東北の諸藩の弱腰な対応と、武士としての誇りを捨てていくことへの憤りだったのかもしれない。しかし、もはや時代は武士の時代ではなくなっていたのである。

10月12日、土方率いる新選組は、艦隊に便乗する形で、現在の石巻市折浜から箱館を目指して出帆した。

新政府軍側に追いついてられ、北進する土方歳三と新選組。その門出は勝算の見込みなどまったくない絶望的な船出だった。にもかかわらず、ラストサムライは自らの死に場所を求めて最北の地を目指したのである。



榎本武揚と土方歳三は宮城県石巻市で合流し、艦隊を停泊させていた折浜から新天地である函館をめざして出帆した。

最後の望みをかけて土方は、この地から旅立っていった



連敗に次ぐ連敗を重ねてもなお、最後まで戦い続けた土方歳三。日和山より眼下に広がる太平洋の大海原を見たとき、土方の胸中に去来するものは何だったのだろうか。



会津藩主 松平容保の生き様

朝敵の汚名を着せられ、その責任を二手に引き受け藩滅亡にまで導いてしまった会津藩最後の藩主の松平容保。孝明天皇から絶大の信頼を得て宸翰と御製まで下賜された容保は、幕末から明治の日本における最も忠信の人だった。

文◎名前◎名前

歴史の波に翻弄された
悲運のラストエンペラー

松平容保は、天保6年（1836）12月29日、美濃国高須藩10代藩主松平義建の第6子として、江戸四谷の邸で生まれた。弘化3年（1846）4月27日、陸奥国会津藩第8代藩主松平容敬の養子となり、嘉永5年（1853）に養父容敬が病死。こ

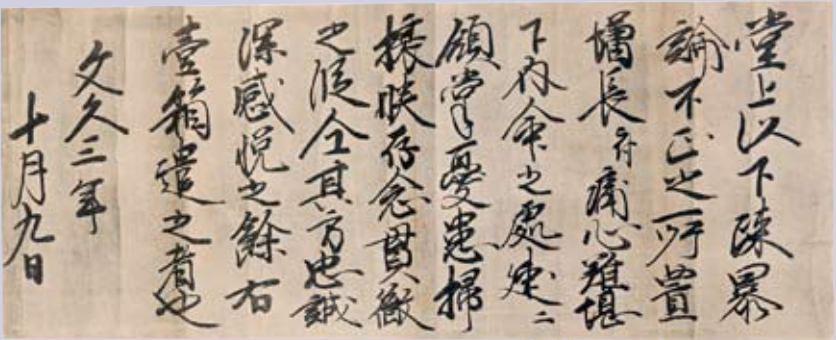
のとき会津松平家の最後の藩主としての悲運の人生が決定つけられる。26歳で京都守護職を任された当時、宮中の女官たちから熱い視線を浴びるほど、現代風に言えばしょうゆ顔のイケメンだった容保だが、その甘いマスクとは対照に、京都での攘夷派に対する情け容赦ない取締で、京都人からは忌み嫌われていたと言われている。実際、新選組による京都



孝明天皇から下賜された御製

たやすからざる世に 武士（もののふ）の忠誠の心をよろこびてよめる
和（やわ）らくもたけき心も相生のまつの落葉のあらず栄へん
武士（もののふ）と心あはしていはほをも貫きてまし世々の思ひ出
（「京都守護職始末」口絵より複製・白虎隊記念館にて写す）

（容保公肖像画・白虎隊記念館にて写す）



孝明天皇から 下賜された御宸翰

「堂上以下陳暴 論不正之所置
増長存痛心難堪 下内命之處
速ニ 領掌憂患掃 攘朕存念貫徹
之後全其方忠誠 深感悦之餘右
壹箱遺之者也
文久三年十月九日」
(「京都守護職始末」口絵より複製・白虎隊記念館にて写す)



京都守護職始末

会津藩家老山川浩が編述者で、会津藩士で東京帝国大学の学長を歴任した弟の健次郎執筆による書。明治44年11月20日初版で、当時は非売品だった。後に平凡社から同書名で出版されている。当初、政治的混乱を招くとしてなかなか発刊を許されなかった。(白虎隊記念館蔵)

会津藩主 松平容保の生き様

での活躍は、他方の見方をすれば執拗なまでに不逞浪士や攘夷派を弾圧した鬼の所業とでも言えなくもない。

会津藩に伝わる家訓が 容保の心を突き動かした

文久2年（1862）、幕府人事の刷新により、越前国福井藩主松平春嶽が政事総裁職に就任する。春嶽は、桜田門外の変以降、倒幕の動きが顕著になり、京都では一部過激な攘夷派が暗殺や商家にゆすりたかりをするなど、世の中が大きく乱れて



旧式の武装しか持たない会津藩は、新政府の新式銃に苦しめられる。命中精度だけでなく、中には連射式のものもあり、刀と槍を中心とした武士ならではの装備はここに敗北する。
(会津新選組資料館蔵)

意であり、内命であったということに分かる。このことから、本当の帝の意は容保にあったはずだが、薩長を中心とした新政府軍は自らを官軍と称して錦の御旗を立て、逆賊の汚名を容保一人に押しつけた。本来ならば、容保よりも徳川幕府の將軍徳川慶喜にその矛先が向けられるべきはずなのに、慶喜は形成が不利になると見るや否や恭順に傾き、江戸城を無血開城し慶応3年（1867）10月14日、大政奉還してしまふ。

愚直なまでに 忠誠を貫いた人

將軍慶喜に見捨てられ、失意のうちに会津藩に戻り謹慎していた容保を新政府軍は容赦しなかった。江戸城が無血開城したことによって、手柄を得たかった血氣盛んな勢力のガス抜きに利用されたという説もある

いた。これに危機感を持った春嶽が京都守護職を打ち立て、その任を会津藩に引き受けるよう依頼した。当時、家老である西郷頼母をはじめ会津藩の家臣たちは、皆一様に反対した。当の容保も固辞していたという。しかし、春嶽は執拗に容保に食い下がり、遂には会津松平家初代保科正之が遺した『家訓15カ条』の第1条を手紙に引用したことによって容保の忠誠心を動かしてしまった。「大君の儀、一心大切に忠勤に励み、他国の例をもつて自ら処るべからず。若し二心を懷かば、すなわち、我が子孫にあらず 面々決して従うべからず。」

歴史の評価を巡って、容保がこの京都守護職の任を引き受けたことをもって、愚かな殿様と揶揄する見方もあるが、若干20代で会津24万石のトップとなった若きリーダーにとつて、藩の命運を決めるこの選択はあまりにも酷なものであった。無論、藩の重臣たちに相談もせず、結論を

が、会津藩だけがこの騒動の責任を一手に引き受ける形となり、会津戊辰戦争へと突入。若松城下まで攻め込まれた会津では、白虎隊と呼ばれる少年隊士や藩士の子女までが戦死もしくは自刃して果てた。

会津戊辰戦争終結後も悲劇は続く。断絶した松平家は異例の早さで、明治2年（1869）に再興を許され、斗南藩と称して下北半島に3万石を得た。しかし、本州最北の極寒の原野に移住した藩士とその家族、領民2万人弱の生活は困窮を極めた。

容保も一時、斗南に入ったが、すぐに東京に呼び戻され、日光東照宮の宮司として徳川宗家の菩提を弔うこととなった。徳川慶喜に見捨てられたにも関わらず、容保は徳川家に対する忠誠を終生貫いたのだ。

容保は、孝明天皇からの御宸翰と御製を公にすることはなかった。それは孝明天皇から内密にとの意向を汲んだ配慮からであった。しかし、先の京都守護職始末の内容が事実とするならば、孝明天皇は御宸翰の内容を公にするなどは決して言っていない。表立って御礼するなど言っていたのである。もし、朝敵の汚名を着せられた時、自らが官軍であると御宸翰を世に明らかにしていたならば、会津藩の命運は大きく変わっていたであろう。それを頑なに隠し通した容保の実直さと潔さに、深い敬愛の念を禁じ得ない。

出したのではない。反対していた家

老たちも、さすがにこの家訓の前では口を噤まざるを得なかった。それほどまでに、保科正之の家訓は会津藩にとって大切な心の拠り所であり、憲法のようなものだった。

容保こそ官軍であり、 朝敵の汚名は事実無根

会津戊辰戦争終結後も、終生容保は肌身離さず、決して誰にも見せることがなかったという竹筒があった。容保の死後、遺族がその中身を見ると、それは二通の書状だった。京都守護職時代、容保の功績にいたく感銘を受けた孝明天皇から賜ったという御宸翰と御製だった。『京都守護職始末』（山川浩著・平凡社刊）には、この御宸翰を賜った当時の経緯が克明に記されている。

「さきの八月十八日の一挙に、もしその所置が当を失っていたらゆゆしき大事になるべきところを、まったく卿の指導がよろしきをえたので、

すみやかに鎮静した。深く歡感あら

せられるところである。よつて、重く賞賜あらせられたい歡慮ではあるが、卿のみに賞賜があると、かえつて物議を生じかねない。そのようなことがあれば、卿もまた心安じないであろう。ゆえに、予から、ひそかに宸筆の御書と御製を下し給う次第である。もとより、ごくごく秘密な御内賞のことであるから、その点をよく心得て、表立って御礼などということは堅くつしむように」と前置きされ御宸翰と御製を下賜された。

孝明天皇の御宸翰には「堂上以下、暴論を疎ね不正の処置増長につき、痛心に堪え難く、内命を下せしところ、すみやかに領掌し、憂患掃攘、朕の存念貫徹の段、まったくその方の忠誠にて、深く感悦のあまり、右一箱これを遣わすもの也。」とあったという。孝明天皇は容保の忠誠心を高く評価され、深く感悦とまで賞賛している。また、容保が京都守護職として行ったことは、孝明天皇の



松平容保之墓

容保は明治26年(1893)12月5日、目黒の自宅で59歳の生涯を閉じた。死の前日、明治天皇の英照皇太后から牛乳が下賜され、容保は感涙にむせびながら飲んだという。歴代松平家藩主と共に、会津若松市の会津藩主松平家墓所に眠っている。

取り壊し直前の若松城

明治5年(1872)、パリ外国人宣教師らによる日本国内旅行の際、同行した日本人写真家が撮影したとされる取り壊し直前の若松城天守閣。明治7年(1874)、天守などの建造物が解体撤去された。(白虎隊記念館蔵)